

新田次郎全集

2

新潮社版

縦走路・先導者

縦走路・先導者
新田次郎全集第二卷

昭和四十九年八月二十五日発行
昭和五十三年六月二十五日八刷

定価 一〇〇円

著者 新田次郎

発行者 佐藤亮一

発行所 新潮社

東京都新宿区矢来町七二丁目2番 振替東京四一八〇八
電話 業務部 03(265)五二一 編集部(265)五四一一

印刷 株式会社金羊社
製本 神田 加藤製本

© Jiro Nitta, 1974, Printed in Japan.

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

縦走路	5
先導者 *	119
寒冷前線	155
白い壁	167
登りつめた岩壁	179
気象遭難	215
疲労凍死	229
雷鳴	273
薬師岳遭難	295

雪呼び地藏
風が死んだ山
解題

352 325 309

縱走路・先導者

縱
走
路

陽が昇っても大氣の成層は俄かに崩れようとはせず、大地に接した重い冷湿な空氣はじっとしたまま時間の経過を待っていた。

適当にしめつた道路は、バスが通り過ぎると、申しわけのように埃を上げたが、すぐに、紙を拵げて投げた軽さで収まり、バスの振動で道路脇の草の葉の裏露がこぼれると、黒子のような斑点を残した。空は一点のくもりもなく、山は近く見え、民家の陰影が朝日と共に移行した。

バスの乗客は何れも眠い、無表情の眼をしていた。つめれば坐れるほどの座席の間隙はあったが、そうしてくれといい出す者も、自ら進んで席を譲ろうとする者も居なかった。バスの乗客のほとんどは土地の人ばかりで、それぞれの仕事に向う前の一刻を、前夜の夢から醒め切れない、寝不足の身体を、バスの揺れるにまかせ切っていた。

蜂屋道太郎は大きなルックザックを前に置いて、眠って

いた。揺れる身体を持ちこたえるために股を開いて、膝の上に手を置いた格好で眠りこけていた。その蜂屋道太郎の肩に寄り掛るようにして、半ば口を開いて眠っている木暮英作の顔にバスの窓から朝日がさしかけていた。二人のルックザックは、彼等の足元から離れて、バスの中央側にかたむき、乗客の昇降の邪魔になったが、誰も文句は言わなかった。なにがよくって、こんな重い物を担いで出てくるのかなという表情が乗客の共通したものであり、歓迎もしないかわりに、排斥もなく、二人にまつわりつく眼指しは総じて寛容で、感動のない、登山者に馴らされている眼付であった。

蜂屋道太郎はバスの中に流れ込んで来る朝の冷氣をむさぼるように呼吸していた。木暮英作はややせつかな息遣いだった。新宿を出発してから大町でバスに乗りかえるまでの満員夜行列車内の、睡眠不足をバスの中で一気に取り返そうとしている二人の生理的努力は、乗客に、いくらかの同情心と笑いをもたらすに充分であった。二人は四人分の座席を占領して、窓外に展^{ひら}けていく、すばらしい山村の朝の一瞬を置き去りにしたまま眠りこけていた。

バスの最後のブレーキは二人の姿勢を一方に偏^{ひとへ}らしたまままで固定した。蜂屋道太郎は木暮英作の体重を両足をつっぱったままでこらえていた。

「大出につきましたわ……」

蜂屋道太郎は、その声を彼の眠りと無関係に遠くの女の声に聞いていたが、彼の肩を叩いた手は邪魔だった。彼は叩かれた方の肩をゆすり上げながら、リズムを持った軽い刺激が、彼に加えられる、好意的な人の手であることに気がつく、音を立てていた呼吸をやめた。終点の大出に着いたのだと、前の女は同じことを繰返した。

本暮英作は蜂屋道太郎に邪険に肩を押し戻されて眼を開いた。

「大出についたんですよ」

前に立っている女が、本暮の焦点のきまらぬ眼に向って吐き出すような一言を残して、くるつと向きを変えて降車口へ向った。女は大きなルックザックを背負っていた。

女流登山家に美人は居ないという俗説がある。女流登山家という定義も美人という標準も曖昧であり、主観によってどうにでもなる愚説ではあるが、仮に女流登山家を登山の好きな女性で、穂高岳、槍岳、白馬岳等の北アルプスの高山に経験ある女性という狭い範囲の経験者に当て嵌めるとすれば、川原田千穂は女流登山家として迎ええられる条件を持っている美人であった。美人という点が例外ばかりでなく、彼女は単独登山を試みるという点で異例に属する女流登山家でもあった。

川原田千穂の山歴は、^{ここ}此処四年ぐらいのものであった。過去二年間の山歩きの多くはひとりであった。危険でない程度の単独行が、彼女の自信を固め、山登りはひとりに限るという、彼女だけの一つの法則を作り上げていた。冬山はやらないし、岩登りもやらなかった。彼女は夏山の、よく知られた山、知られたコースを、小屋から小屋へと無理のない単独行をやった。彼女は東京近辺のハイキングコースの単独行はやらなかった。誰でも安易に行ける山には本能的な危険を感じた。

山登りだけが狙う高い山には、山登りしか居ない。少なくとも、六、七貫目のルックザックを背負って山へ登ろうとする男は危険ではなかった。不意に出合った時に、びっくりした眼はするが、それだけですんだ。むしろ危険は山麓にあった。山麓をうろつき廻る男達は総じて危険であり、この他に都会人に反感を持つごく僅かな地元の人もいた。だから彼女は山麓を歩く時は、他のパーティーの前か後に際いて行って、道が明らかに下界と隔絶された処まで来ると、単独行に移った。歩調は軽速だった。

川原田千穂の予定は針の木峠を越えて、立山に出、剣岳に登ってから富山へ出るコースであった。平凡なコースであったが、安全率を取って、三泊四日と踏んでいた。

彼女は大出を出発した時から、背後の二人の護衛を頭の

中に入れていた。バスの中で眠りこけていた二人の男は、紙靴を穿いていて、紙は相当に磨耗していたし、ルックザックも汚れていた。ピッケルには皮のカバーがしてあるから、業物かどうか判定しがたいが、眠っていないながらも、かえこむようにしているチロルハットの古さから見て、山麓の伴侶としての条件を備えた男達と判定した。

川原田千穂は自然な歩調、呼吸が正調であり、時々顔の汗を拭う程度のペースで、土埃のつもった、ゆるい傾斜の道を歩いて行つた。道の両側は林であつたが、道幅が広いために、さえぎるものがなく、太陽が山の上に昇ると急に暑熱を覚えた。

「やっぱりひとりなんだぜ……」

蜂屋道太郎が前後を見通してから、二十メートルの前方を歩いていく女性登山者の発見がさも重大なことのようと言つた。

「ひとりだよ、彼女はバスの中からずっとひとりで、そして大変な美人なんだ」

木暮英作は、彼女について、蜂屋道太郎よりも、多くを知っている口振りだつた。

「美人だつて？ 嘘をつけ、あのルックザックを見ろ、まず五、六貫目はある、俺達の背負っている重量と比較して一貫目とは違つていないぜ、それにだ、あの歩きっぷりは

玄人だ、女流登山家に美人は居ないってことを知ってるだろう、あの女は登山家だが美人ではない、美人であつてたまるものか」

蜂屋は、彼女が美人でないことが疑いのない事実であるような言い方をした。

「バスで起きた時、顔を見なかったのか」

木暮にそう言われても、蜂屋には彼女の顔は思い出せなかった。

「いや、絶対に美人じゃあない、女流登山家に美人は居ない、これは山の法則みたいなものだ、一杯賭けてもいい、彼女は美人じゃあない」

「賭けるのか。そいつは面白い、美人でなかったら、一杯おごろう、だが美人だったら君は彼女の前で、頭をぺこりと下げて、御同行願えませんかと言うんだ。それでいいな」

いいなと言つた時に木暮は立止つて蜂屋の顔に眼で念を押した。いたずら半分の賭けごとではなく、女が美人であることに根を持っている言い方だつた。山にかけては蜂屋が先輩であるから、今まで何回か山歩きをしても、木暮の方から、盾をつくようなことも言つたこともなし、意見が違つたところで、直ぐ了解出来た。少なくとも、こつんと来るような言い方をする木暮ではない。蜂屋は木暮が夜行

列車の寝不足と急に暑くなったために機嫌が悪いのだと解釈した。

川原田千穂は一定の速度でゆっくり歩いてた。休まないうで済む程度の余裕を持たせ、一步一步を踏みしめていた。二十メートル背後の男達は、おそらく今迄の彼女の経験のすべてがそうであつたように、彼女を追い越そうとしてピッチを上げ、追い越す瞬間に、行先を聞き、一緒に行こうというに違いない、それは山で道連れになつた者同士の当然な成行きであり、相手が男である限りはそうでない筈がないと考えていた。追い越した時に汗を拭きながら、貴女はそれだけの荷を背負つて足が速いとお世辞をいうことも分り切つていた。山麓の護衛者はそれでいいのだ。やがて山道にかかり、ブナの林になり、雪溪でも見えるようになると、彼女に置いていかれるか、無理をしてアゴを出すかどうかである。千穂は一度も背後を振り返らなかつた。そうしない方が、護衛者の追従は急であることをちゃんと計算していた。

三十分たち、一時間を経過したが、男達は近づいて来なかつた。男達の穿いている紙靴が石を踏みつける音や、時々交わす話し声はあつたが、背後に推定する距離は依然として二十メートルであり、それ以上の間隔を男達がつめようとしないうちは歴然としていた。千穂は彼女の歩調が速

すぎはしないかと思つて見た。呼吸も平常であり、汗の出方もそう激しくはなかつた。彼女のペースは正常であり、二十メートル背後の男もおそらく平調な一步一步を刻んでいるとすれば、彼女と男達との間には二十メートル離れて別々のパーティーが存在することになる。彼女は意外に感じた。二人の男達に無視された寂寞感が、道がまだ山麓の危険の区域を脱していない理由にからんで、彼女を不安にさせた。

彼女は一時間半歩いたところで、道をそれた木陰でルックザックを下ろした。小休止であると同時に、男達の行動を観測する機会でもあつた。彼女は男達の方に背を向け、胸のポケットから地図と山日記を取り出して時間と場所を記帳した。男達も停止して、木陰を求めて涼を入れている気配が感じられた。彼女は山に向つて微笑した。山麓の護衛者はちゃんとその任務を実行しているのだ。

輻射熱は天と地から三人の登山者を攻めた。日射は帽子を焼き、頭と帽子の間隙の空気を膨脹させた。乾いた道路からの輻射熱は、衣服につつまれた皮膚にまで触手を延ばそうとしていた。照り返しの乱反射は眼に痛かつた。彼等三人は苦難を黙々と受けながら、忍従の一步一步を、高度差と戦いながら運んでた。山道になり、原始林が日をさ

えぎってくれるまでは太陽が邪魔だった。

ずっと下から自動車の音が聞えた。三人は一斉に振り返り、待った。荷物を満載したトラックが、うめくようなエンジン音の響きを上げて登って来る。男達二人が手を振り、声を上げて、トラックに停車を求めたが、トラックは、まるで何ものじみた鈍重さで、二人を無視して通り過ぎた。川原田千穂は走りながら叫んだ。トラックが止り、助手台に坐っている人夫風の男がドアを開けて身体をずらせながら乗れと言った。相手が女であるから乗せてやろうとする、みだらな笑いが男の顔に浮んでいた。

千穂は後ろから来る男達二人を大声で呼んでから、
「私達トラックの上で結構ですわ——」

と運転台にそういうと、損をしたような顔をしている助手台の男にすばやく二枚の百円紙幣を渡した。咄嗟の間に、ことを片付けていこうとする事務的な処置であった。

「あなたたちが先に乗って、私を引張り上げるのよ」

彼女は蜂屋道太郎と木暮英作に向って命令する調子で言った。しかし、二人がトラックの上にルックザックを抛り上げ、よじ登って、手を差し延べようとした時には、既に彼女もトラックの上に収まっていた。

「今夜は大沢小屋、それとも針の木小屋までなの？」

トラックが動き出すと直ぐ千穂が言った。

「大沢小屋までの予定ですがね……」

蜂屋道太郎はそう答えて、初めて川原田千穂と顔を合わせた。澄んだ大きな眼をした女だった。水色の帽子に水色のズボン、白い袖長のシャツを着ていた。

「針の木を越えて、立山、剣岳方面へ行かれるんでしょう——」

木暮が言った。五、六貫目の装備をしてこのコースに入り込んで来るからにはそういう旅程が組まれていることは当り前のことであった。

「勿論そうですわ、皆さんも同じコースでしょう、途中まで、御一緒にお願いします」

「途中まで……」

木暮が聞き返した。わざわざ途中までとことわる理由が彼には分らなかった。

「そうね、多分大沢小屋あたりから先はひとりで結構ですから」

「途中まででなくてもこっちはかまわないんだ」

蜂屋が太い声で言った。

「でも、私は途中まででいいのです」

同行を求めながら、一方では同行を嫌っている千穂が妙な女に見えた。どうせ女性単独登行者という存在自体がおかしなものであるから、彼女の変り方も尋常である筈がな

いと考えながら、

「そうですか、じゃあお好きなように」

蜂屋は腕を組んだ。初めっからどうでもいいことだったのだ。相手がひとりで行動したければそうするがいい、蹤いて来なければ蹤いて来ればいい。女は赤の他人だ。

「おい、木暮、トラックを降りたら、ピッチを上げよう、今日中に針の小木屋まで行けるぞ」

蜂屋はその言葉を千穂に当てつけて言っていた。相手が美人の登山家であつたところで、俺達は特別な扱いはいしないうぞと宣言している積りだった。トラックが止った。付近に工事事務所があり、そこから上は龍川にそつて大掛りな道路工事がなされていた。

工事に従事中の土工たちは仕事をやめて、登山者を見た。登山者は三人だったが、彼等が刺すような眼を向ける相手は、水色の帽子を被つて、蜂屋道太郎のうしろにかくれるように蹤いていく川原田千穂であつた。聞くに耐えないような卑猥な言葉が飛んで来た。男二人と女一人を一つのグループと見たてての、猥雑な弥次であつた。女だという声は、次々とリレーされて、三人が通り過ぎる道の両側の工夫は勿論、ずつと遠くの飯場に居る男達までが、千穂の姿を凝視した。

三人は急いだ。何も言わずに、聞かずに、急ぐしかこの

場合方法はなかつた。人影がなくなり、急に静かになった処で、道を降りて来る五人の人夫に出遭つた。

「女だ、女がいる」

そう言つてツルハシを投げ出した男の声はぎくりとするような重い響きを持つていた。川原田千穂を眺める眼がぎらぎら燃えていた。男は千穂を目掛けて真直ぐ進んでいった。千穂の前後の男などはてんで問題にせず、ただ偶然に発見した女という存在に狂喜して近づいて行く格好だった。男は千穂の前に立つて、確かめるように女だともう一度言つてから、土によごれた手で千穂の手を握ろうとした。

「いたずらはやめろ」

蜂屋道太郎が言つた。蜂屋の声でその男は初めて男の存在に気がついたのか、蜂屋と木暮の顔に等分に眼を配つていたが、突然げらげら笑い出した。笑い出すと笑いが止らぬような笑いを続けながら、蜂屋の背後にかくれ込もうとする千穂の方へ近寄ろうとした。蜂屋は持つてゐるピッケルを振り上げて、いたずらは止めると続けて叫んだが、男はピッケルも護衛役の二人の男も問題にせず笑いの中に時、キャッキャツという合の手を入れながらまるで逃げる雛をつかまえるような格好で千穂にせまつて行つた。

「安よさねえか」

五人の中で一番年かさの男が安という男の肩を掴んで引

止めてから、三人に向つて、

「やいやい山登り、てめえ等の踏んでは誰が作った道だ。御苦労様ぐらい言つて通つたらどうだ。それにだ、こんなところは女の来るところじゃねえ、ばか者共め——」

三人は逃げた。逃げて、安という男の笑い声は三人の後を追つて行つた。

暗い樹林の中の山道は、越中の葉売りが荷物を背負つて山を越えて来た往古からの道であつた。ここには電源開発事業の爆破の音も、道作りのツルハシの音もなかつた。

蜂屋道太郎は、やや速歩で先頭を歩いてゐた。急ぐ必要はなかつたが、不愉快なことから一刻でも早く遠ざかりたいめだつた。三人は徹底して無言だつた。蜂屋は折角の山登り行の第一目が、女の登山者と同行したために不愉快にさせられたことにこたわつてゐた。彼の後から歩いて来る女はもう安全地帯に來てゐるのに、一口もお礼らしい言葉も吐かない。その女に一言でいいから文句が言いたかつた。そのきつかけを作るために蜂屋は急いでいたと言つてもいい、彼女がもう少しゆっくりとか、休みましようかと音を上げた時に、女の単独登山などという危険なことをやめろと言つてやるつもりだつた。言へば彼女はすみませんとかもうしませんとか謝るに違ひない、張りつめた気が

急にゆるんで泣き出すかも知れない。そうなるうちよつと困るが、泣いた女をなぐさめるのも悪くはないと考えていた。蜂屋は彼に続く女の足音に注意を払つた。間隔が遠のき、やがて聞えなくなる頃になつて、呼び掛ける女の声を待つてゐた。だが、彼女の足は彼と一メートルとは離れない距離を正しく踏んでゐた。蜂屋が止れば、背後の足も止つた。その足音を振り切るために彼が急ぐと、彼女はちゃんと追従してくる。蜂屋は彼女が存在をうるさく感じ出した。なんとかして振り切つて前へ出ようとした。山へ入つた第一日はけつして無理な行動をしてはいけないという原則を忘れて、ピッチを上げた。ペースは乱れ、彼は滝のよ

うな汗をかいた。

蜂屋が平常の歩調になつたのは、ラストを歩いてゐる木暮英作がずっと後になつたからである。蜂屋は木暮の遅延を、女を相手につまらぬこたわり方はやめろという木暮英作の警告に取つた。そう気がついた時に蜂屋道太郎は疲労を感じた。彼はルックザックを背負つたまま腰をおろして、小休止の態勢を取りながら、木暮を待とうとした。そうすれば彼女も休止の態勢を取るものと思つてゐた。

川原田千穂は、今まで世話になつた謝礼のすべてを微笑にかえて、蜂屋道太郎の前を通り過ぎるとき、

「色々有難うございました」

と言った。有難かったが、これからはひとりで結構でございますという顔だった。

「行っちまうんですか」

蜂屋が言った。行つてしまふのが惜しいのではなく、遅れて登つて来る木暮英作と揃ったところで、もっと丁寧に有難うございますを言つて貰いたかった。そう言われるだけのことはしてやつたつもりだった。

「ひとりの方が気が楽ですから」

川原田千穂は蜂屋を見捨てるように言つた。蜂屋はむつとした顔で立上つた。ひとりの方が気が楽だと言う女を樂にさせたくなかつた。こつちで蹤いていく限り、相手は振り切ろうと急ぐだろう、女のことだ、いつかは顎を出すに違いない。

(生意氣な女め、少々美人で、ちつとばかり山に経験あることを鼻にかけやあがつて)

蜂屋は追われるよりも追う方が楽なんだと思いながら千穂の後を蹤いていった。山道に沿つて風の流れが、千穂の匂いを運んで来た。風が變つたり、千穂との間隔が遠のくと匂いは消えた。

川原田千穂は蜂屋道太郎を低く評價した。お先にと言つた時、どうぞと知らん顔をしてそのままに済まされぬ男は、やっぱり俗物でしかない。同行したところでちつとも面白

くない男に思われた。千穂は蜂屋道太郎を少しずつ離れていった。

大沢小屋は白樺に囲まれていた。小屋が見えた時、蜂屋はほつとした。彼女が大沢小屋に一泊することは間違いないと考えていたから、自分達二人も大沢小屋泊りという標準で彼女の後に従つた。彼女は大沢小屋は覗いても見なかつた。小屋を過ぎると、彼女の足さばきは、前よりも細かく、そして速かつた。林を出た辺りで急に前が開けた。大雪溪である。午後四時であつた。

「針の木小屋まで行くんですか」

蜂屋の方で千穂に声を掛けた。

「その積りですけど、あなたは……」

「水場を探してキャンプしよう、そうした方がいい時間なんだ」

蜂屋道太郎は、大雪溪を見ると寒氣を覚えた。雪溪の急傾斜を眼で測つて、明日の日程を持つ今日ならば、無理をせずに、いくら早く寝る準備にかかつて、むしろ早朝に起きた方が有利だと計算した。それにずっと遅れている木暮英作のことが氣にもなつた。名も知らない、同行者の女と無意味な張り合いをすべきではないことを夕暮の時刻が蜂屋に教えていた。

雪溪にかかる前で蜂屋は、川原田千穂の追尾をやめて、

キャンプ場所を探し始めた。千穂には、氣をつけて行けども、さようなとも言わなかった。なにか言つてやりたかったが、口から直ぐ出なかつた、そのまま二人の距離は離れていった。

水場があると呼びかけたのは千穂の方からであつた。蜂屋がキャンプをすることに決めると、千穂の氣持が急に變つた。蜂屋が持つてゐるテントはおそらく夏山用の三人用か四人用、一人の余裕はあるに違ひない。余裕がなければ、彼女自身が持つてゐる、ツェルトザックを張ればいい。

「そのテントは三、四人用ですわね」

千穂は予め蜂屋に念を押してから、テントの片隅に寝かせて貰えないものかどうかを尋ねた。

「つまり、これから一つのパーティーで行動しようっていうんですか」

蜂屋は千穂の行動には相変らず疑問を持つていた。この女はひどく氣まぐれで、なにをやり出すか分つたものではないという警戒心が蜂屋をやや躊躇させた。だが千穂の方は蜂屋の氣持にはおかまいなく、テント張りが終ると、薪集めにかかるし、米をといで、ハンゴを焚火にかけた。

木暮英作は相当遅れて來た。彼の遅れたのは一つには、身体 of 工合が悪かつたことと、一行に遅れまいとして急いだためであつた。彼はひどく疲労してゐて、テントについ

ても、手伝ひ出来るだけの元氣はなかつた。

森は太古のままに暗く、雪溪は白布を流したように見えていた。ランタンが三人の疲れた顔を照らし、テントの内部が一つの仮の住居としての性格を持ち始めた。川原田千穂はテント設営にも食事にも一番よく働いた。食事の量は三人のうちで一番食べた。木暮は疲れ過ぎたせいか、ほんの少ししか食べなかつた。第一目の疲労は三人に眠ることを急がせた。千穂は彼女の持つて來た空氣マツトに空氣を入れ、その上に寝袋を敷いて、中にもぐり込んだが急に忘れ物でもしたように起き上つて、

「わたし川原田千穂というの、よろしくね」

にこりともせず、そう名乗ると、寝袋にもぐり込み、顔を暗い方に向けて直ぐ軽い寢息を立て始めた。

夜になつてから氣温が著しく上昇した。通常体験するのとは逆なあたりで外氣の變化は寢袋の中まで伝わつた。天氣が悪化しつゝある証拠は氣温ばかりではなく、テントを打つ風の音にも出ていた。ジュラルミン製の組立て支柱は風と共に揺れ、摩擦音を上げた。

蜂屋道太郎は氣温の上昇と風の音を雨の前兆とまで聞き分けてはいなかつたが、ひどく胸苦しい不安な長い夜だつた。